

第2回三木市小中一貫教育推進協議会 議事録（要旨）

日 時： 令和4年7月26日(火) 午後7時～午後8時40分

場 所： 市役所5階 大会議室

出席者：

構 成 員	山下 晃一	神戸大学大学院	教授
	安藤 福光	兵庫教育大学大学院	准教授
	又吉 健二	三木市区長協議会連合会	
	密 祐浩	三木市区長協議会連合会	
	井上 澄子	三木市区長協議会連合会	
	西岡 寿徳	三木市連合PTA	
	吉川 敬二	三木市連合PTA	
	阿南 愛	三木市連合PTA	
	小紫 達矢	三木小学校	校長
	長谷川 珠里	吉川小学校	校長
	藤井 克成	吉川中学校	校長
	坂田 直裕	別所中学校	校長
事 務 局	本岡忠明教育総務部長、横田浩一教育振興部長、 荒田知宏教育施設課長、鍋島健一学校再編室長、 武内克朗学校再編室副室長		

1 開会

委員長あいさつ

(委員長)

第2回小中一貫教育推進協議会を開催する。

前回6月に開催し、2か月近くが経とうとしているが、つい最近あったような気がしている。新聞にも取り上げられ、市民の方の注目度も高いと思う。

本日は「これからの変化の激しい世の中であって、どのような子ども達を育てていきたいのか。」と、それをふまえた上で、「三木市ではどういった形で小中一貫教育を軸として、学校の制度を整備していけるのか」という2つ議事について協議を進める。

まずは、事務局からの説明を聞き、進めていく。今回も、委員の皆様の活発なご意見をお願いします。

2 前回の振り返り

(事務局)

前回の振り返りをしておく。

第1回の三木市小中一貫教育推進協議会について、小中一貫教育推進協議会リポート「ふれあい」のようにまとめた。

特に「2 意見交換の様子」内の赤色で「？」がついている部分についてお答えしていく。

「小規模な学校から大規模な学校へ行くことでのいわゆる中1ギャップが激しいのでは？どう対応していくか？」に関しては、小学校同士のつながりと、小学校と中学校とのつながりの2本立てで、児童生徒の不安や戸惑いを少なくし、適応しやすくなるような環境づくりを進めている。

同じ中学校に進学する小学校の6年生が、お互いにつながりを深められるような学校行事を行っている。

また、中学校教員が小学校で行う出前授業や部活動体験等の取組をしている。さらに、小学校6年の卒業前段階と、中学校1年に進級時の2回アンケートをとり、少しでも児童生徒の不安に対応できるように進めてきた。

アンケートによると、各活動の中で中学校の先生と接することで中学校生活がイメージできたという結果もあった。

ただ中学校になると勉強が難しくなるのではないかという学習に対する不安もあるという結果も出ている。

「地域の教育力をどのように活用するのか？」に関しては、この3年間で30校近い先進校を見てきた中で、小中一貫教育とコミュニティ・スクールは両輪の働きをしていくのが大事であるとアドバイスいただいた。

コミュニティ・スクールというのは、地域の力もお借りしながら、学校で子ども達を育てていく仕組みだが、詳しい内容については後日お知らせする。

「小中一貫教育実施時、教員免許についてはどのようになるのか？」に関しては、小中一貫教育をする上では特に問題はないというのが先進校の話であった。

例えば中学校の社会の免許があれば、小学校免許が無くても小学校の社会を教えることができるという教員免許の性質がある。

法律上、義務教育学校については小学校と中学校両方の免許が必要というル

ールがあるが、附則規定があり、当分の間は片方の免許でも良い、というルールもある。

三木市の場合、小学校の教員で中学校の免許を持っている人は約 50 パーセントおり、中学校の教員も約 25 パーセントの人が小学校の免許も持っている。

先進校と比較しても三木市の教員の免許保有の割合とほぼ変わらない。現状であっても小中一貫教育をする上では特に問題はないと考える。

「小中の子ども同士が仲良くなるのは早いが教員同士はどうなのか？」に関しては、実態についてはなかなか交わらないという現状があるようだ。早急に統合したある先進校については、教員同士が意思疎通できず教育体制を作るのは難しいと聞いている。

そういった意味で、三木市では、教員同士の意思疎通を、まず今のうちから図っていき、その後施設一体化の方向へ、整えていく必要があると感じた。

「校長はひとりだけ？」に関しては、施設一体型の小中一貫校では校長先生 1 人、教頭先生 3 人体制という所が多かった。小規模校については校長先生 1 人教頭先生 2 人体制、中には、小学校に校長先生 1 人中学校に校長先生 1 人で協働していくというパターンもあった。

校長先生 1 人がマネジメントし、教頭先生 2、3 人がサポートしていくというのが一般的な組織のようだ。

「子ども数に対する教員数の比率は増加するのか？」に関しては、一体化した場合も、子ども数に対する教員数の比率については、すごく増えるということはない。

法律により、施設一体型の場合も一旦は小学部の学級数により教員数が決まっている。中学部も同様である。施設一体型の小中一貫校では、小学部の教員数と中学部の教員数を合わせた人数になる。ただ小学校と中学校が一貫することにより、学校にいる教員数は別々の時より多くなり、いろいろな角度から子どもを見ていくことが可能になると思う。

「小中一貫教育の制度」に関しては、次回の視察で、実際に校長先生等に説明していただこうと考えている。事前に疑問の内容を送り、説明の中でお答えしてもらえよう計画している。したがって、今回、事務局からの説明は無しにしたいと思う。

(委員長)

事務局の方から説明があったが、委員の皆様、再確認したいこと等、いかがか。何かあれば後でも構わないので、発言願う。

今は無いようなので、次へ進める。

3 議事

(事務局)

テーマ1の子ども像について、2040年の社会(令和2年度科学技術白書:文部科学省)を見ていただく。

スマートフォンの登場などがまさにそうであるように、今の科学技術の進歩の速さから考えると、空想科学小説ではなく、お示ししたような世界がまさに現実になろうとしているように思われる。

これから子ども達が生きていくうえで付けないといけない力とは?どういった子どもを育てていかないといけないのか?そういった視点でご意見をいただきたい。

(委員長)

続いて、まさに未来に向けて日々ご準備をさせていただいている先生方、今の子どもを指導する中で、感じられていること等教えていただきたい。それをもとに、どんな力を?どんな子どもを?育てていかないといけないのか、私たちも議論していきたいと思う。

(委員)

学校の現状をお伝えする。

タブレットPC1人1台配布により、学びの幅や質が変わった。教師による子どもへの指導方法も変化する。

目立った問題行動が少なくなった。

子どもの中で「失敗したくない」という気持ちが強い。

親がソフトになり、親子の距離感が近いように感じている。

(委員)

小中学生の子どもがいるが、自分の子どもの頃と今の子どもを比べた時に、親の威厳というのか、私のころは何か調べたい物があって親に教材を買ってもらう時にはお願いをしていた。親に対して尊敬するような気持ちがあった。しかし、今はタブレットが配られたことで、自分で調べられることができるので、親に頼まなくても全ての情報が手に入る。

運動のことを教えるにしても、技術面はタブレットで調べると正解を教えてくださいるので、親が教える事はメンタル面ぐらいしかない。そのあたりの事から親と子どもの距離が縮められてきているのかなと思う。

(委員長)

その中で、どんな風に育って欲しいと感じているか。

(委員)

子どもに対しては、タブレットで正解は得られるが、それを自分自身でしっかり吟味して考え、正しく学んでほしい。寄り道はしないのかなあという気持ちだ。

(委員)

タブレットでリアルタイムに分かるというのは良いと思うが、ただ言葉にするのと、文章にするのではちょっとしたニュアンスが伝わらないのではないかな。

特に LINE で、何気なく送った一言が、そんなつもりではないのに受け取り側には冷たく伝わってしまうことによるトラブルが起こることがある。言葉やコミュニケーションを大事にする教育をしていただきたいと思う。

(委員)

小学生の子どもが3人います。それぞれ配られたタブレットがあり、調べたい事もタブレットで調べている。

タブレットの宿題が出て同じクラスの子とも共有するという内容のものもあるので、その時間は一生懸命にタブレットに向かい頑張っているのが良い事だとは思っている。

ただ子ども達がどんどんタブレットを使いこなして進化していくのに対して、大人がついていけず、子ども達が何をやっているのかわからないな、と思うことがある。

学校の先生方によって、タブレットをよく使う先生はタブレットでの宿題が多く、そうではない先生はノートでの宿題が多くなっている。子ども達の中でも「字ばかり書くよりタブレットを使う宿題がいいな。」と思っていることも事実だ。

授業の中でのタブレットの活用も良いとは思っているが、学校の現状の説明にあったように、失敗するのが怖いから、発表できないのだと思う。小さい集

団では、自分の意見も言いやすいので、もう少し工夫していただきたい。

子どもには、社会に出た時にコミュニケーションのとれる大人になってほしいので、どうしたら人に伝わるか、どうしたら人を傷つけないかという事を学校で学んでほしい。

(委員)

2040年の社会のイメージ等を見せていただく中で、絶対に変わったらダメなものがあると思う。その部分が抜け落ちているのではないか。とんでもない社会を見させてもらったように思う。

他市の教育の指針に「人は人によって人となる」という言葉がある。全ては人との関係だと私は思っている。優しさや思いやりは人間にとって大事なものであり、地域で活動していても子ども達の笑顔や喜怒哀楽を引き出すことができれば良いなと思いつながら行事の運営をしている。

(委員長)

変化が激しくなればなるほど、実は芯の部分で何を大事にするのかという事が問われてくるかもしれない。

(委員)

タブレットがあれば、調べたいものは検索すればすぐに出てくる。辞典というものが価値のないものになってきているのではないか。貴重な文化財の写真も本や辞書等がなくても検索すればすぐ画面で見ることができる。

ただ本物を目の当たりにすることで感動するはずだ。ページをめくり調べる過程と、検索してすぐ出てくるのでは全く違うと思う。調べることによって覚えていくということもあると思う。

3Dプリンタでじゃがいもはできない。機械化がどんなに進んだとしても、土や水、光があつて作物はできるという事、動物・植物みんな命があつて大切だということを教えていかないと精神の豊かさが失われてしまうのではないか。便利になればなるほど教えていかないといけない事だと思った。

(委員)

私も先ほど2040年の社会のイメージを見て、びっくりした。子ども達はその世界を生きていかないといけないので大変だと思う。

その中での教育も大変だと思う。

(委員長)

子ども達が優しくなってきた、と私もずっと感じていて、大学生に反抗期が無いみたいだ。その要因はいくつかあり、説明も可能だが、その要因分析と同時に評価も必要になってくる。そこに子ども達が身につけて欲しい力があるかもしれない。

人を傷つけないように、という話もよくあるが、ネガティブな事が全て悪いわけではなく、傷つくことを避けてばかりいけば、傷ついた時の対応が出来なくなるので、傷つかないことよりも傷ついた後の対応をどのように出来るか、子ども同士あるいは大人に助けを求める等、根源的な力が子ども達に必要である。

そのことが、小中一貫教育の中でも見通せるものではないかと思った。

テーマ2

(1) 三木市の現状とこれまでの協議の経緯

(事務局)

- ① 中学校区ごとの小中学校子ども数について
- ② 三木市の子ども人口予測について
- ③ 小中一貫教育に関するこれまでの協議

(委員長)

質問や意見等いかがか。

(委員)

統合により、4小学校が集まり児童はとても喜んでいる。例えば、「友達が増えた」「人数が増え、今までできなかった遊びができるようになった」「授業中、いろいろな友達の意見が聴け、楽しい」等、言っている。

閉校した地元の学校のきめ細やかな指導が良かったと思われている保護者もいる。

地域の方からは、せめてこれくらい的人数で子ども同士で切磋琢磨する方が良い、と言われた。

私は、今後の子どものことを考えて、ある程度の集団の中でぶつかり合える教育環境が良いと思う。地元から学校が無くなるのはさみしいことだが、それよりも、これからの子ども達のことを考えたら、人数的にも切磋琢磨できる場が必要である。

(委員)

補足になるが、三木中学校へは三木小学校の1/3～1/4の児童が、三木東中学校へは2/3～3/4の児童が進学している。

15年程前にはなるが、進学先を同じ1つの中学校にしてほしいと保護者からの声上がり、PTA会長が中心となり、アンケートをとった。

進学先を1つにすることにはほぼ反対がなかった。しかし、どちらの中学校にするかは、大きく割れ、決まらなかったため、教育委員会へは要望は出していないという過去がある。

(2) 施設一体型小中一貫校

(委員長)

視察に向けて質問や確認しておきたい点等いかがか。

(委員)

6ページの本来であれば6年生の時に修学旅行や卒業式等のイベントがありますが、東条学園ではどのようにされるのか。

(委員長)

区切りとして達成感を味わえるような行事をどう位置付けているかという受け止めでよいか。

(委員)

2ページの9年間がつながった時の評議会の役割、学年の構成はどのようにされているのか。

もう一点はPTAをどのようにされているのか。

そして、3ページ目の平日の家庭学習時間の目安として7年生から120分から180分というのは、塾等を含めた時間になるのかどうか。

(委員長)

子どもさんたちがどのようにして縦に繋がっているのか、生徒会・児童会や遊び集団の中でも何が工夫されているのか気になる。

今までは最大集まっても1年生から6年生だったのが1年生から9年生になり、繋がれる人はどんどん繋がっていけるところが面白さでもあると私も思った。

(委員)

第1、第2、第3ステージで分かれており、制服も5年生からになっている。徒歩通学は1～6年生で7年生から自転車通学になる。区切りとして、1年か

ら6年という事は残していながらステージの区切りを設けるのはどうなのか。

先ほども出ていたが、修学旅行の扱いをとっても、区切りが学年なのか、ステージなのか、ポイントが混ざってしまっている気がする。

(委員)

感想になるが、2ページの学習の基礎、豊かな心、健やかな体を、というものを見ると、まるで「知徳体」のようなものがベースにあるように思った。

それから9年間を見通したと書かれていて教員の定数だけでやっていけるものなのか、加配教員を付ける事はできないのか。

7ページの制服については、ジェンダーの関係もあるので、ブレザーにし、区別なく選択できるので良いと思った。いわゆる中1ギャップを防ぐという意味でも良いことだと感じている。

あと8ページのコミュニティ・スクールについては、地域の人間は、学校の応援団になりたいと思っている。学校との関係を、緩やかに手を繋ぐことができると良いと思う。

学校の困りごとを言っていたら、それが業務改善につながるだろうし、安全面の配慮やより子ども達が活発に活動できる要因になると思う。

(事務局)

東条学園は令和3年度の年度途中に開校をして、新しい校舎での教育が始まって1年経っていないが、可能な範囲で疑問点を届け、回答を得たい。ただ施設面については完璧に作り上げてスタートしているので施設と教育内容の融合というところはしっかり見ていきたいと思う。

4 閉会 副委員長あいさつ

(副委員長)

皆さんのお話を聞き、2つ思うことがあった。

1つは、今の子ども達にとってどのような力が必要となるのか、に関してである。

タブレットのことが出てきたが、私が読んだ文献では、大人と子どもの知識や文化の再生産を巡る問題はもう5、60年前に大人が敗北しているということが書いてあった。昔は口語と文語が違っているから、文語が分らない子ども

達は、どうしても大人に教えてもらわないといけない、という時代が長く続いていた。しかし、戦後口語と文語が一致して大人に何も習わなくても知識が手に入りやすくなった。しかもテレビがそれを加速させた、タブレットはそれに終止符を打ったと思う。

そういう時に、大人がいないという事ではなくて、有象無象にある知識や情報をどのように取捨選択して大人たちは意思決定していくのか、自分の考えを作っているのかという部分では絶対に人生経験というのが必要である。これこそ大人の役割である。今後の学校教育・家庭教育において重要なのは大人がそういったことをどう考えているのか、思考力・判断力というものがこれまで以上に求められてくると思う。

何のためにこれから教育をしていくのかという事は、これからもこの委員会で議論をしていく必要があり、それが小中一貫教育の大黒柱になり、9年間を考えていく一つのベースになるような議論だったと思う。

もう1つは、4・3・2年制という9年間の区切りに関することである。

他の地区の小中一貫校を見ていると、前提として4・3・2制と言っただけでも内実は6・3や5・4等かなり使い分けをしている気がする。

先ほどあった、卒業式にしても、ステージ制をとっている学校でも、それに類するイベントはしている。中高一貫校だと別れのない卒業式になる。一応中学校の卒業式はするが、翌日から高校は一緒である。卒業式や類するイベントにおいて、あなたはもう中学生ではなく、高校に上がるんだよという意義づけを持たせている。

4・3・2年制というのは、おそらく小学校と中学校を繋いでいるという感覚があり重要なことだが、局面においては使い分けていく必要があると思う。

ある程度歴史のある小中一貫校の話を知ると、柔軟にされているという校長先生のお話を聞いている。

そのあたりの制度をどのように柔軟に活用していくのか、東条学園は開校して1年程しか経っていない学校であるので、どこまでそれが出来ているかわからないが、視察の際には皆様と意見交換できればと思う。